
青天の破片外伝

庵子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

青天の破片外伝

【Zコード】

Z0555K

【作者名】

庵子

【あらすじ】

妖怪。闇に住む者達。彼らは一つの時代も人間と隣り合わせに存在している。『青天の破片』^{ソラノカケラ}のあのキャラクターのお話や、過去など本編では語られない物語をお届けします。

Crimson Flow : プロローグ (前書き)

このお話のキャラクターは本編第45部より登場します。
あわせてよろしくお願いします。

Crimson Flow：プロローグ

のどかな田舎町にひっそりと佇むこの学校で事件が起り始めたのは一週間前だった。

最初の被害者は陸上部の元エースだ。

元エースで今は問題児。

怪我が原因で陸上を辞め、今は不良少年と化している。その男子生徒はある日校内で血まみれで倒れているのを発見された。

当初ただの喧嘩かと思われたが、それから次々に生徒が同じような状態で見つかる。これまでに三人。

無数の切り傷を負つて、一命は取り留めたものの入院中だ。いずれも不良、問題児そんな風に位置づけされている生徒ばかりだった。

彼らの日頃の行いから見て事件性は薄く内輪もめか何かだと見られていた。

傷がどんな刃物よりも鋭いものでつけられたと判明するまでは。学校側は事件の真相解明と犯人を見つけだすためにやつきになつた。

しかし手掛かりはつかめず、警察すら手をこまねいているのが現状だ。

様々な憶測が飛び交う中、生徒の間では人間ではない何かの仕業だという噂がまことしやかに囁かれだした。

事件は人の手を離れ、人の手に余るものとなりつつある。人ならざる者の所業ならば尚更のこと。

事件の行方は闇の世界に住む者に委ねられようとしていた。

こんな時に教育実習なんて……タイミング悪すぎ。

学校中を包み込む重苦しい空氣に耐えかねたよつて黒崎藍香くろさきあかこはため息をもらした。

屋上である。

遠く青い空に鳶が優美な輪を描いて飛んでいる。

校内で起つてている事態とは裏腹にのどかな風景が眼下に広がつていた。

冬を目前にして空氣は乾いて冷たい。

けれど職員室内のピリピリとした空氣に比べれば寒い方がいくらいマシというものだ。

風が頬を撫で、藍香の亞麻色の髪とスカートを揺らした。

そろそろ、戻らないとなー。

時計に目をやつて藍香はそんな事を思つた。

もうすぐ昼休みが終わる。

職員室に戻ろうとしたその時、一人の男子生徒の後ろ姿が目にとまつた。

この季節に屋上に来る者は珍しいが、誰でも登れるようになつてゐるからそこに生徒がいてもおかしい事じやない。

藍香が気にとめたのはその頭越しに煙が立ち上つてくるよつて見えたからだ。

おそらくは煙草の煙。

教師を目指す者としては放つておくわけにいかない。

足音を忍ばせて藍香はその生徒に近付いた。

「君一タバコ止めなれーーー！」

「やだなあ、煙草なんて吸つてませんよ」

慌てて振り返った男子生徒が携帯灰皿をポケットにしまつのを藍香は見逃さなかつた。

「素直に残りを渡せば今回だけは見逃してあげるわ」

が、生徒は二コリと笑みを浮かべて吸つていないと繰り返すものだから、差し出した手がむなし。

「君は確か今日転校してきた…」

朝、職員室で見かけた顔だつた。

「架牙深です」

転校生の架牙深龍介は如何にも優等生といつ風貌だ。

黒髪に黒ブチ眼鏡。

シャツは第一ボタンまでとめてあるし、ネクタイを緩めることもなくブレザーもきつちりと着込んでいる。

「架牙深君みたいなタイプがタバコ吸つなんて意外ね」

いくら否定しようつと喫煙は決定事項らしことに苦笑する龍介。ちょうどその時昼休みの終了を告げる予鈴が鳴つた。

早く戻らなければ指導係の教師に今度は藍香自身が注意を受ける羽田になるだらつ。

「見逃すのは今回だけよ！タバコは百害あつて一利なし…やめなさい！いいわね！君も教室戻りなさいよー！」

慌てて駆け出し、屋上と校舎内を繋ぐ扉の前で振り返つてそれだけ叫んで彼女は去つていった。

黒崎藍香。

21歳。牡牛座。A型。

家族は父、母、弟。

系列大学の理学部の三回生。

将来の夢は化学教師。

一週間前から教育実習中。

龍介が得ている情報としてはそんな所だ。

何の変哲もない女子大生。

なのに龍介には胸の内をざわつかせる違和感が感じられたのだ。

「…ええ。彼女も容疑者の一人ですから

藍香を見送つて、まるで話し相手がいるように龍介はそう言った。

教育実習生は藍香の他に4人いる。

美術の長谷部杏奈、世界史の松原琴美、体育の佐々木敬太、国語の橋野。

同じ大学の五人だが学部が違いあまり面識もないようだ。

彼らがこの学校にやつてきたのがちょうど一週間前。

切り裂きジャックだの何だと騒がれ始めている事件が起こり始めた時期と一致する。

犯人がこの中にいる可能性が高い。

そういう情報を得て龍介はこの学校にやつて来た。

犠牲者が増える前に何者の犯行かを突きとめたい。

見下ろした先のグランドでは体育の授業の準備中だ。

龍介はそこで楽しそうに生徒を指導する佐々木敬太の姿を見つける。

彼も容疑者の一人だが今こうして見てている限りではおかしな点はない。

龍介は教室へと踵を返した。

転校生という身分だが別に真面目に授業を受ける必要はないのだけれど龍介は律儀にも授業をサボる「とはしなかった。

彼は基本的に勉強が好きだ。

けれど彼が人間ではなくなったのは大学卒業間近だからその時点ですでに高校で学ぶような内容はとっくに終えている。それでも何度も同じような内容の授業を受けているにも関わらずつまらないとは思わなかつた。

時代は常に移っていて、世の中の変化が少なからずそこにも反映されているから。

だから彼は面白いとと思うのだ。

欲を言えば高校よりも大学に通いたいと思わないでもなかつたが。

「おい！お前が転校生か？」

放課後の校舎裏で唐突に声がかかつた。

「誰に断つてこい通つてんだ？」

「すみません。断りを入れないといけないとは知らなかつたもので

とほけた答えに一瞬の躊躇があつた。

「ま、払うもん払つたら通してやるよ」

「はあ」

「通行料だよ、通行料」

金髪やら茶髪やら派手な頭のいかにも不良少年らしい男子5人に前後を塞がれ進むことも戻ることもできない。

ありがちな展開だ。

日も傾きかけているのにこんな所にたむろしている彼らはどれだけ暇なのだろうと龍介は表情には出さず思った。

「お聞きしたいことがあるんですが」

「はあ？ お前話聞いてた？ 金出せつってんだよー。」

「わかんねえなら痛い目見せてやんよー。」

一人がはなつた大振りのパンチは当たれば威力は大きからうがかわすことは龍介にとつて難しくない。

ほんの半歩ずれて体をひねつた龍介が軽く肩を押しただけで、金髪の少年はそのまま校舎の壁に突っ込んだ。

「てめえ！ ふざけやがって！」

残りの四人が色めき立つ。

数分後。

痛い目を見ていたのは不良少年達の方だった。

「切り裂き事件の被害者の事で聞きたいことがあるんですが

パンパンとわざとらしく両手を払つて龍介は繰り返した。

この場所が不良のたまり場だということは有名な話だ。

転校初日の龍介の耳に届くくらいに。

そして、実は龍介は最初から彼らに会つたためにここに来たのだ。

「彼らが事件に会つ前に関わった人物はいませんでしたか？」

足元に転がる不良少年はうめき声を上げるばかり。

「痛い目みますか？」

「ま、待つてくれーあ、あいつら、ウザい先公がいるって…」

もう十分痛い思いをした少年は慌てて答えた。

「教育実習の。黒崎とかいうやつだ。あいつにまかれて頭きてたんだ」

「他に知つてこる事は？」

「も、もうねえよーホントだ」

「そうですか」

彼らが知つてているのはそれだけだと龍介は判断した。

黒崎藍香の正義感の強さは体験済みだ。

黒崎藍香が犯人なのかな？

先ほどの違和感といふうにも彼女には引っかかる点が多くつた。

藍香は教材倉庫で奮闘中だった。

明日の実験に使う教材を準備するためだ。
ほこり臭い室内でダンボールを漁つていると、ガラリと扉が引か
れた。

「あ、ごめんなさい。誰かいるとは思わなくて」

藍香と同じく教育実習生の松原琴美だった。
真っ黒な髪を一つに束ねて分厚い眼鏡をかけて飾りつけが無い。
良く言えば真面目、悪く言えば地味で気が弱そうともいえる。

「松原さんも明日の準備？」

「え…ええ、明日使う教材を取りに」

琴美と話すのはほんと初めてだった。

「この中から探すのはちょっと大変そうですね」

藍香は身長が170cm近くあるからなんだか大人っぽく感じら
れて、琴美はしどろもどろになりつつもなんとかはにかんだ笑みを
浮かべた。

琴美は笑うと可愛らしさに雰囲気になるんだ、といつのは藍香の感
想だ。

しばらく教材を探し回るガサ「onso」という音だけが部屋を支配していた。

田町の物を探し当たのは一人ほぼ同時だ。

「す、」立派な世界地図ね」

琴美は小柄な彼女の背丈ほどもあるつかといつ地図のホコリを払つていた。

「最近は使われてなかつたみたいです。でもこりやつて地図を見ると思うんです。世界にはこんなにも沢山の国があるんだつて。そして、その一つ一つの国に物語があつて、人の歴史が国の歴史を作つてきたんです。私はそれを教わつたから、私も教師になつてそれを伝えたいんです！」

藍香にはそんな風に熱く語る琴美が意外でもあり、素敵だと思えた。

「あ、早くしないと怒りますねー私、行きますね。それじゃ

「うふ、じゃあ。お互い頑張りうね！」

藍香は教室の前で急ぎ足で去つていいく琴美を見送つた。

琴美は真面目なばかりかと思つていたけれど話してみると意外に柔らかい印象だと藍香は思つた。

「さ、私も早く準備終わらせないと」

悲鳴が聞こえたのはその時だ。

それは、今、琴美が去つていった方向だつた。

藍香は廊下に呆然と座り込んでいた琴美の姿を見つけた。

— 松原：さん？

その背中越しに赤く染まつた床と倒れた人間が見える。見覚えのあるセーターと変わつたデザインのスカート。うつ伏せで顔は見えないが教育実習生の長谷部杏奈に間違ひなかつた。

「黒崎さん、長谷部さんが……あ、あれは確か、橘君……」

琴美は震える声で教育実習生の一人の名を挙げた。

「橘君？まさか実習生の橘要君！？」

「そう……私は怖くて……見てはいる」としか出来なかつた。

琴美はよほど動搖しているようだ。

無理もない。

「摘要はどうちに行つたの!?」

震える指先が示した方向へ藍香は駆け出す。けれど廊下を曲がった先には誰の姿もない。たぶんとっくに逃げてしまつたのだ。

それ以上杏奈や琴美を放つてはおけず、藍香は元の場所へと引き返す。

そこには琴美の姿はなかつた。

杏奈は元のままで倒れていて、今までと同じなら命までは奪われていなかつた。

けれど琴美を探すよりも杏奈を病院に運ぶのが先だつた。

龍介がその無惨な現場に到着した時、藍香は倒れている杏奈の傍らに屈み込んでいた。

血の匂いに駆けつけてみれば案の定だ。

心の内でやはりとつぶやく。

藍香は手にした小さな小瓶に被害者の血液を採取したようだつた。杏奈を発見したというだけならまず考えられない行動だ。

「あなただったんですね？」

藍香が一瞬ビクッと身をすくませ、ゆっくりと振り返つた。

「あなたが、やつたんですね？」

龍介はもう一度ゆっくりと質問を繰り返した。

あまりにタイミングが悪い。

藍香自身でも直前の行為を考えれば疑われるのも無理がないと思つた。

「わ、私じゃないわ！ 橘要が」

「橘要？ それはあり得ません。橘先生なら書道部の部室にいらっしゃいましたから」

そう、龍介は藍香を探していて橘要を見つけ、それからじばりく様子をうかがつていたのだから。

血の臭いに気付いたときには確かに彼はそこにいた。

「そんな……！」

琴美が嘘をついていたということだろうか。それを言つたところで架牙深龍介が信じてくれるとは到底思えなかつた。

「先生、目的はいったい何ですか？」

「待つて……私がやつたんじゃないって証拠を、見せるから」

藍香にしては珍しく歯切れの悪い言い方だ。

「でもその前に、彼女を病院に！」

「……わかりました」

切り裂き犯かもしけれない危険な人物を怖がる様子のない龍介に疑問を抱く余裕は今の藍香にはない。

人を呼んで、見つかる前に一人はその場をこつそりと離れた。

場所を教材倉庫に移し誰も来ないことを確認して鍵を閉める。

そうして藍香はさつき得た長谷部杏奈の血液の入った小瓶を取り出した。

龍介はただ黙つて藍香の次なる行動に注意を払つてゐる。

一瞬、彼女はためらつた。

今から起ることは自分が犯人ではない証拠と共に『普通の人間』ではない証拠を示すことになるだろうから。

けれどそれは今のところ本当の犯人を知り得る唯一の方法でもあつた。

「架牙深君、ライター貸して貰える?」

龍介は素直に内ポケットからライターを取り出して手渡す。

まもなく日が沈むのだろう、室内は暗い。

そこにライターの火が灯る。

その火を瓶の口に近付ければ不思議なことにそちらへと燃え移つた。

ぼんやり明るい炎は瓶の口でゆらゆらと揺らめき、そこにだんだんと見覚えのある風景が浮かんできた。

この学校の廊下。

向こうから歩いてくる人物。

残酷な笑みに彩られた口元。

あまりに強烈な記憶を血は覚えている。

血に刻まれた記憶は炎によって炙り出され真犯人を映し出していく。

「おい。そこを動くなよ」

突然、龍介の雰囲気が変わった。

今までの行儀の良い表情とは打って変わって口元を嘲笑がかすめる。

ちょうど口が完全に沈みきつたことなど藍香は気付いてははずもない。

「架牙深君?」

藍香の脇を何かがかすめ、ピシッと音を立ててガラスが弾けた。

窓に開いた穴が弾痕だと認識できるより早く、ガラスはまるで薄い紙のように切り裂かれ床に落ちて散らばった。

龍介の手の中には拳銃。

窓の外には松原琴美が立っている。

いつたいどちらに驚けばいいのかもはや藍香にはわからない。目の前で繰り広げられた一瞬の出来事はまるでスローモーションのようになじみ、それなのに思考が追い付かなかつた。

銃口を向けられた琴美は枠だけになつた窓の向こうで炎の中の記憶と同じ残忍な笑みを浮かべている。

「ジャック・ザ・リッパー？ ハッ！ まんまじやねえか」

龍介　いや、今は龍介の体を借りて表に現れた『リュウ』という存在　はおもしろくもなさそうに吐き捨てた。

ガラスを紙切れのじとく切り裂いたのは琴美の指先から20㌢ほども伸びた爪。

その爪は何物をも切り裂くナイフのような鋭さと硬さを備えている。

銃を突きつけられているにもかかわらず琴美は前へと足を踏み出した。

銃弾は容赦なくその肩を打ち抜いた…かに見えたが弾丸は琴美に届く寸前で切り裂かれて足元に転がつた。琴美の姿が消える。動きが速すぎて藍香の目には追いきれないのだ。

リュウには見えているのだろう。

「チイツ…！」

見えてはいても当たらない。

弾を「ことじ」とく裂かれて無駄に消費していく」という立つリュウ。

「松原さん、なぜ？なぜあなたが生徒や長谷部さんを傷つけたりしたの！？」

姿が見えないのでどこにともなく藍香は呼びかけた。
意外なことに、応じて琴美は動きを止める。

「撃たないで！」

藍香は琴美とリュウの間に立ちはだかった。

二人に身長差はあまり無いから真っ直ぐに視線がぶつかる。

「どけ！」

それでも藍香の視線はゆるがない。

「私は松原さんと話がしたいのよ！」

琴美が驚いたような、それでいて泣き出しそうな表情を浮かべる。

「私はああいう子達が嫌いだつた。派手な外見で、いつも地味な私を見て笑つてゐる。高校生の時に私をイジメた子達と一緒に。だから今でもそれ違う度に怖くなる……」

琴美は切り裂きジャックから元の彼女の表情を取り戻し唇を噛み締めた。

「大人になれば変わると思つてた。だけど同じだつた。教師になる夢は諦めようと思つた。でも、これを見つた時から私は変わつたの。もう怯えることはない。あの子達も、長谷部さんも、嫌な物は

消せばいいってわかったから

鋭い爪が輝く琴美の指にはアンティークなデザインの指輪がはまつていた。

見つめていると何故か心の中をざわつかせるそれが琴美をこんな風にしてしまったものに違いない。

「こんなやり方間違ってる。嫌な物は消せばいいとは思わない。誰だって苦手なものはあるけれど、それに正面から向き合った時に変わるものなんじゃないの？」

「私にはそんなのは無理よ」

それでも必死に呼びかける。

「そんなことない！逃げるのを止めて振り返るだけで、それだけでいいの。それが変わり始めているってことだから」

「私はあなたみたいに強くないの。…あなたは嫌いじゃなかつたけど、知られてしまったから仕方がない…。もう引き返せないの」

また彼女の顔から彼女の表情が消える。
もう琴美を止められないことを示していた。

また琴美の姿が藍香の目には捉えられなくなる。
人間には見えないほどのスピードで今度は躊躇なく自分を襲うだ
ろう刃物のような爪を、自らが切り裂かれる光景を藍香はどこか現
実味のない感覚で想像していた。

だが次の瞬間、乱暴に腕を引っ張られ、藍香は後方に倒れ込む。
ザクツという生々しく耳に残る音を聞いた。

「捕まえたぜ」

琴美にも負けないほどの残忍な笑みをリュウは口元に浮かべる。
指ごと掴み取られ、琴美は食い込ませた爪を抜くことが出来ない。
爪はその根元までがリュウの手のひらに埋まり、甲から突き出しつ
いていた。

深紅の液体が爪を、腕を伝う。

床を濡らす。

けれど痛みなど感じていなかのようリュウはニーッと唇を釣り
上げた。

尖った犬歯が覗く。

リュウはいつそ優雅なまでの動作で琴美の白い首筋にその牙を食
い込ませた。

琴美の視線はどこか遠い世界を見つめている。

それは恐ろしさと艶美さとを併せ持つ光景だつた。

藍香が声も出せないまままだ見つめる前で、リュウは喉を通る熱
い血を堪能する。

けれどそれが許されたのはほんの数秒。

頭の中では龍介が止めるとうるさく叫んでいた。

吸血行為への強い嫌悪感が自身にまで伝わってきて、リュウは物

足りないまま渋々首筋から牙を抜く。

そして、まだうつとりとしたままの琴美の指から指輪を抜き取つた。

指先で弾く。

指輪は宙を舞い、一発の弾丸に狙い違わず打ち碎かれた。

同時に琴美が意識を失つて倒れる。

切り裂きジャックを作り出した魔力は消失したのだ。

「もつたいね」

リュウは琴美にも指輪の残骸にももつ興味がないといつ風に腕を伝づ自らの血を名残惜しげに舐めとる。

五本の爪に手のひらから甲まで刺し貫かれたはずの傷は跡形もなく消えていた。

「架牙深君…きみ…」

「オレの名はリュウだ。架牙深君じやねえ」

本人の言つ通りさつきまで架牙深龍介であつた人物は藍香の知る彼ではありえなかつた。

話しか方と表情の違いでこつも別人になるものなのか。

「えつと…架牙深君に取り憑いてる…吸血鬼…とか…?」

「オレは幽霊かよ」

「あーまさか血を吸われた齧歛さんも吸血鬼になるじゃあー?」

藍香は恐ろしい可能性に考え至つてあわてる。

「血い吸われたぐらいで吸血鬼になるかよ。お前魔女のくせにこんなことも知らねえの？」

“魔女”と思いがけない言葉に藍香は一瞬ドキリとした。

普通の人間じやない事は知られたとしても、そこまではつきりと言ひ当たられるとは思つていなかつた。

彼が言つ通り藍香は魔女の血を引いている。

古くから続く家系だ。

しかし本当に魔女らしく暮らしていたのは数代前の「先祖様まで。藍香自身はといえば人間となんら変わりない生活を送つてきた。むしろ魔女らしいことなんてせいぜいわざわざのよつた簡単なまじないができる程度なのだ。

「わ、私はほとんど人間と変わらないものー悪い？」

何故だかりュウにはムキになつてしまつ藍香だった。

たぶんリュウの態度に腹が立つのだ。

腹が立つて拳を握り締めて、そこで初めて藍香は自分の手のひらに違和感があることに気付く。

痛みと濡れた感覚に目をやれば先ほど倒れ込んだときにガラスで切つたらしい傷があつた。

吸血行為を目にしたばかりの藍香は反射的に血を見せまゝと手を隠す。

しかしそんなことをしてもリュウには気取られていたのだが。

「ハンッ。安心しろ、てめえの血だけは頼まれてもいりねえ

彼はしつしと手を振るジエスチャーまで交えて拒絕した。

「なつ……？」いつの意味よ。」

ホツとしたけどなんだかまた腹が立つ。
助けて貰つておいて何だが藍香はこのリュウとこう吸血鬼に良い
感情を抱けずにいた。

「さて、オレは帰るわ」

「え？ ちよつヒー！」のまま放つておくれのー。？」

室内にはガラスがちりぢりつているし弾痕はあるし琴美は倒れたま
まだ。

「あとは山城つとおつさんが来るからやられせつやー」

「ちよ……それって誰よー待ちなさいよー」

去つていくリュウを琴美を放つたままでは追いつくとも出来ず、藍
香はその後ろ姿を見送るしかなかつた。

藍香は屋上で空を見つめていた。
今日も鳶は優雅に輪を描いていた。

彼と出会った場所だ。

けれどここに来てみても架牙深龍介の姿はあるはずもない。
わかつていてるのに藍香は足を運ばずにはいられなかつた。
結局彼には助けて貰つたのにお礼すら言つていない。藍香の今があるのは彼らのお陰なのに。

リュウが立ち去つた後、途方に暮れていると山城という人物は本当に現れた。

刑事だという。

藍香はこの惨状をどう説明したらいいものかと慌てた。

犯人と疑われて逮捕されるかもしれないとも思った。

けれどその人はリュウから事情を聞いていると言い、おまけにこんな怪奇な事件には慣れているようで、簡単に話を聞いただけで帰してくれたのだった。

今回の事件は全て内密に処理されるという。

だから藍香はあんなことがあつたのに比較的平和に教育実習を続けることが出来ている。

警察に保護された琴美がどうなるのか考えると内心平和とは言い難かつたけれど。

ともあれ藍香は今日で実習を終えこの学校を去る。

教師になつたら彼に　いや、彼らにまたどこかで会えるだろうつか。

たぶん会えない方が幸せなのだろうけど。

あんな目に遭うのはもうじめんだと心底思つただけど。
どこかで会えることを期待している自分がいるのだ。

教師になりたいというのは小さい頃から抱いていた夢。

それに向かって進んではきたけれど、こんな事件に関わるまでや
れはまだ夢だった。

琴美はあんなにも熱く夢を語っていたのに。

彼女はどこかで道に迷つてしまっていたんだね。

琴美のような子がいたら一緒に道を探して、そして背中を押せる
やうになりたい。

藍香の中で、夢であつたものは決意をともなつて今ははつさつとし
た田標となつたのだった。

本編では書ききれない話がたくさんあるので外伝として書いてみることにしました。

第一弾は架牙深龍介のお話。（「りゅうしづか」ではなく「りょうしづけ」と読んでやってください。）

龍介の話はシリーズとしてやってみたい気もします。

他にも書きたい話はこいつはあるのですが筆が遅すぎで…

次の更新がいつになるかは今のところ未定です（汗）

本編はものすごくゆっくりとですが歩みを進めております。
もしよろしければこちらもよろしくお願ひします。

読んでいただき本間にありがとひざきました。

隕の草薙さん・プロローグ（前書き）

キャラクターについては本編（特に第10部～15部）を合わせて読んでいただくとわかりやすいかと思います。どうぞよろしくお願いします。

長きに渡り他国との外交を絶つていたこの国は黒船の来航により新たな道を歩もうとしていた。

後に幕末と呼ばれるこの時代の中で、庶民は来る日本の変革にまださほどの関心を示していない。

というよりも、慎ましやかに暮らす人々にとって、日々をつつがなく過ごせるということこそが最重要であり、日々の営みをすることで精一杯なのだ。

これはそんな時代にあった小さな物語。

門前町として栄えるこの町は昼間なら参拝のためにやつてきた人々が多く行き交い、商店が軒を連ねなかなかに賑わっている一角だ。しかし今は草木も眠る丑三つ時、墨を塗り込めたような深い闇に全てが包み込まれていた。

その闇の中を走る影がある。

袴姿の侍風の男が数人。

手に行灯を持っている者もいてそこだけぼんやりと明るい。

その前を走るのは一回り小さな人影だ。

小さめの影は先の見えない暗闇の中を必死で逃げていた。
けれどやがて神社の境内に迷い込み、追い詰めらてしまう。

朱塗りの鳥居の前で侍風の男達は自分よりやや小振りのその影を囲つた。

「狙つたのが俺達だったのが運の尽きだ

「さあ正体を現せ」

追われていた小柄な美女がかざされた行灯から眩しそうに田を背ける。

「何の事やらわかりません。私はただ道案内を……」

「ついて行つて川にはめられたり、持ち物をとられた人間が大勢いるのは知つてゐるが、」

「そうやつて何人の者を化かしたんだ！」

女に侍達が詰め寄る。

一人が腰の刀を抜きはなつた。

「ひい……、『ごめんなさい。もうしませんから。許して

女は狸の姿に変わつていた。

「命ばかりは……！」

「だめだ、化け物の言つことなど信じられるか

侍は挙めるような格好の狸に刀を振り上げる。
しかしそれを振り下ろすことは出来なかつた。

「やめておけ。もう十分だらつ」

男達が一斉に声の主を向く。

誰一人自分達のすぐ近くに立つその人物にその時まで気付かなかつた。

気配を感じなかつたのだ。

刀を抜いた本人ですら腕をつかまれて初めて気がついたほどだった。

すらりと背の高い、こちらも袴姿の男に、行灯を持った一人が光を向ける。

一瞬息をのんだ。

束ねた髪は赤く、薄い色の瞳が光に透けて金に近い色に見えた。髪で顔の左半分は隠れていたがそれでもわかるほどに整った面差しの青年は、感情を浮かべずただ静かに男達に鋭い視線を配る。

「は…離せ！ 貴様何者だ！？」

腕を掴まれていた男がやつと我に返つて言った。

腕を振りほどこうとするがびくともしない。

手近にいた一人が助太刀とばかりに刀を構えた。

そちらに掴まえていた男を押しやつて、青年は地面にうずくまつて震えていた狸を拾い上げる。

一人の男が斬り込んだ刃は空を切った。

それを合図に次々と追つてくる斬撃。

鉄と鉄の打ち合う硬い音が響いた。

いつの間にか青年の手には一振りの日本刀が握られている。

抜き身ではなく美しい模様の鞘に納まつたままの刀が幾度か刃を打ち返す。

男達とて伊達に刀を差しているわけではない。

やがて避けるばかりではいかなくなつた青年に複数の刃が迫つた。しかし次の瞬間男達は驚愕の声を上げる。

刀が半ばから折れていた。

いや、むしろ断ち切られたと言つた方がいい鮮やかさで、白々と輝く刃の残像だけが視界をかすめる。

刃先が地に落ちた時にはすでに狸共々青年の姿は目の前から消えていた。

神社の入口に佇む鳥居よりも更に高い位置に一人と一匹の姿があつた。

人にはとうてい登るのが困難な背の高い大木の枝の上だ。

下にはまだ男達かうるうると辺りを探し回りでいるのが見えた。

様とよく似た金の色の瞳。

頭を撫でられれば化け狸は少し安堵した表情で目を細めた。

書年にはじにかくしてひと氣のなくないたのを眞言し 一跡ひに地上に降りる。

「これに懲りたら人間をからかうのはやめておけ」

やつと地に降ろされた狸は何度も振り返りながら礼を言つて去つていった。

それから数日後の朝のことだ。
晴らしの雲はなく空はどんこまでも青い。
空気は澄んでいて日差しがやつと暖かさを帯びてきた頃。

ドタドタと騒がしい足音が廊下を渡つていぐ。

見た目は年頃の娘なのにそつとは思えない騒がしさであったが、

当人は全く気にする風もなく全力疾走中だ。

程なく中庭に当ての人物を発見して伊緒里は勢い余りつつも足を止めた。

「うと、… じんなと… おったんかいな

息を整える間もなく言えばほつきを抱えたまま屈み込んで鶏に餌をやつていた蒼が振り返り少女のよつに可愛らしき大きな瞳を何事かとぱちくりさせる。

しかし伊緒里が騒がしいのはいつものことなので蒼は餌やりを開した。

「ちよ、ちよっとお、鶏とたわむれてる場合やないでー。」

「洗濯は?」

「それどひやないんやで

「何があつたの?」

そう聞いたのも半ば事務的だった。

「道場破りやー。」

「じひじみひぶつ?」

蒼はやつと立ち上がる。

「やつやー今、来とるんやー！」

蒼は愛らしき面に怪訝な表情を貼り付けた。

「とにかく、一緒に来てえな！」

言つが早いか伊緒里は蒼を抱え上げる。
先程と同じ勢いで廊下を引き返した。

質素な造りの屋敷にはこれまで質素な道場が併設されていた。
既に相当の野次馬が道場をのぞき込んでいる。
といつてもそのほとんどが人間ではなく妖の類であつたのだが。
道場の中では数人の男達がへたり込んでいる。

「これでうちの門下生は全部ですよ」

屋敷の主人、さかきがわせいこいなが榊河成一郎は困ったように頭をかきながら言つた。
道場の主とは到底思えないとよつた優男である。
それもそのはず

「もともとつちは妻が指南役でね。その妻も今は身重で動けません
し、私なんてただのお飾りですかねえ」

といつことだった。

「いやいや、『まかそう』たって無駄だ。うちの門弟が見た凄腕の剣士はこの道場に出入りしていると調べはついてるんだ」

対する道場破りの男は、体格が良くて強面、それでいてどこか親しみのわく表情も見せる。

年こそまだ若いがいかにも頼りがいのありそうな男だ。

「確かに背の高い、赤い髪の、えらく綺麗な男だったと聞いているんだが」

外にいた者達が、黒髪で年は十ほどの中柄な少年である蒼一斎に視線を集めた。

成一郎はまた困ったといつ風に頭をかく。

「ああ、確かにセツヒツの者ではありませんね。しかしアレはひつりの流派ではないのでねえ。ビツヂお引き取りを」

「だが、このままだと俺は看板を持つて帰ることになるわ。困るんじゃないか？」

「…なるほど、確かに、それは妻に半殺しこれかねないな

「な、ならば、その者を呼んでもらおう」

道場破りはにやりと笑みを作った。

「どうわけだから、よろしく」

成一郎は道場を出てまっすぐに蒼の元へとやつて来た。
どうやら覗いていた事に気付いていたらしい。

「どこで見られていたのだから知らないけれど、お前が田立つ姿な
のが悪いんだからね。ほら、主人の命を助けなさいね」

この人はいつもこんな感じで飘々としてどこまでが本気かわから
ない。

榎河家の本筋から随分遠い家に生まれながらその靈力の高さ故請
われて術を継いだ。

蒼の主人となることを引き受けた際、榎河の実力者として立派な
屋敷を持つことだってできたのに元の質素な暮らしを続けることを
条件にした変わり者、というのが一族内の評価だ。

けれど蒼も今の暮らしは悪くないと思つてゐる。

今は契約者のいない伊緒里もここが気に入つていつの間にか居着
いてしまつてゐるし。

だから今はとりあえず道場と主人を護るために一働きしなければ
ならないようだった。

ため息を一つついた瞬間に少年の姿は消え失せて、代わりに赤い
髪を高い位置で結つた青年が出現してゐる。

「蒼ちゃん、頑張れー！」

伊緒里の緊張感に欠ける声援と周りの視線を受けて蒼は道場の入
口へと向かつた。

道場の主につれられて現れたのは想像よりよほど若く線の細い男
だった。

髪で顔が半分ほど隠れているがなるほど弟子達が言つ通り、男にしておくには少々勿体ないくらい整つた顔立ちをしている。
そう思つて道場破りは寸の間見とれ、それから我に返つて言つた。

「俺は今度近くに道場を構える」とになつた草薙楓之進くさなぎふうのじんといつ。一
つ手合させ願いたい」

「……ほひ」

成一郎が背を押す。

「蒼あおだ」

勝負の前に名乗るのは礼儀だと成一郎に促され蒼は渋々そつと
た。

「真剣か木刀かどつちだい？あんた、どつちでやりたい？」

「……そちらの好きにすればいい」

そう答えた蒼に木刀を手渡したのは成一郎だ。

「手合わせなら木刀で十分でしょう。流血沙汰になつたら掃除が大
変だ」

楓之進も素直に木刀を手に取る。

どちらからともなく構えて向き合つた。

瞬間、空気は肌が切れそうなくらいに張り詰める。

先に仕掛けたのは楓之進だった。

蒼はそれをあえて真つ向から受け止める。

体格で見れば己に力の分があるよう見えるのだが楓之進は受け止められた獲物をそれ以上押すことができなかつた。

楓之進には構え合つて初めて気付いたことがある。

蒼の左の腕には指先まできつちりと包帯が巻かれているのだ。

しかし剣を交えてみればその包帯が怪我のためではないことは知れた。

勝負を優位に進める要素には成り得ない。

一度二人は離れる。

互いに隙が見いだせないというようにじばらく距離をとつた。

次に打ち込んだのもやはり楓之進の方だ。

蒼は今度は受け止めはしなかつた。

受け流し、相手の懷に飛び込み様に一撃。

楓之進は見た目にそぐわぬ素早い動きで跳びずさる。

直撃を免れたのはさすがというべきだろう。

しかし蒼はすでに楓之進の動きを追つている。

手が痺れるほどの打ち込みを今度は楓之進が受け止める形になつた。

何とかしのいだが次の一撃は楓之進の手から木刀をもぎ取つていく。

それでも反撃に転じ蹴りを繰り出した所に腹部を凹ぐ一撃。

真剣であったなら命が無かつただろう。

そう思つたときには楓之進の意識は暗い闇へと引きずり込まれて

いた。

「まだ田を覚まさないのかい？」

成一郎は頭をかく。

妖達は横たわる道場破りを取り囲んで、ついついてみたり髪を引っ張つてみたり興味津々だ。

屋敷の一室に寝かされた楓之進はしばらく田を覚ましやつにない。

「蒼、やりすぎだよ。まつたく」

咎める言葉に答えず、少年の姿の蒼は楓之進の額に乗った手ぬぐいを桶の水で冷やし直した。

確かにやりすぎと言われればそうだろう。

最初はもつと適当にあしらひつもりでいた。

だが、この男はそうする余裕を蒼に与えないほどには腕が立つたのだ。

それに蒼は勝負を急いだ節があった。

鶏の餌やりも庭の掃除も途中だつたし、なによりこんな洗濯日和を逃す手はないと思ったのは最近すっかり奥方の代わりに家事に勤しんでいるからである。

式神をこんなことに使うのもこの主人くらいだけれど、やつてみるとなかなかに没頭してしまつ。

「この道場破り、人間にしたらまあまあやる方や。それに蒼ちゃんのことが知つてたみたいやんか。何者なんやろか？」

伊緒里は蒼の隣で楓之進を興味深げに眺めた。

「さてね。うちはそつちの道じや有名でもないし道場破りされる覚えはないんだがねえ」

「その事だけど、実は…」

楓之進は蒼の事を弟子から聞いたと言つていた。

その弟子が誰なのか蒼には見当が付いている。

といつても誰といえるほど知つてゐるわけではないが、狸を追いかけていた侍達と楓之進の太刀筋はよく似ていたのだった。

「どうして黙つていたんだ」

数日前の出来事をすっかり聞き終えたあと成一郎は小言をこぼす。ただでさえお前は目立つのに、と。

蒼があのあたりに出向いたのは元はといえば成一郎の命によるものである。

言い渡されたのは妖怪騒ぎの調査……のつこでに安産祈願で有名な神社があるから御守りを買ってこいというものだった。

たぶんそつちが本来の目的で、調査は建て前だと蒼にもわかつてはいたのだが。

神社にたどり着いたのは夜も更けた頃で、追われていた狸に出来て妖怪騒動を解決したものの結局御守りは買えず、手ぶらで帰つてかなり文句を言われた。

その上人間相手に大立ち回りをやらかしたこと言おつものなら確実に小言が増えるのは目に見えている。

だから黙つていたのだが結局しつかり小言を聞くはめになつた。

「しかしその男達、妖とわかつていてその狸を追つていたんだね？ 同業者…だつたら知らないはずないんだが」

「」の楓之進といつ男もそうだけど、あの時の男達も術の類は一切使わなかつたんだ。本当に同業なのかどうか」

妖退治を生業としているのなら、追つていた妖を逃がした蒼に対し腹を立てたとして説明もつくが。

その時だつた。

「おおとかうわつとかいう声に目をやれば道場破りが布団の上で上半身を起こした姿勢で固まつていた。視線は取り囲む妖達に注がれている。

普通の者には見えぬ小さな妖が彼には見えていたようだ。

「やつぱりあんたこの妖らがみえるんか？」

伊緒里が腕を組んで凄みを聞かせて覗き込む。

「見えるんやな？」

「…ああ」

楓之進もさすがにたじろぎ頷いた。

妖が見えても困まれることに慣れてはいない。

「お前たちがいと話が出来ない。少し離れていておくれ

固まつた楓之進に助け船を出したのは成一郎だつた。

妖達も屋敷の主に言われれば仕方がない。

わあわあと騒がしく布団から離れた。

「驚いた。術物の類が大人しく言つ」とを聞くとは

楓之進は意外そうに目を見開く。

術物 つまり化け物が人間と仲良くしているのがよほど珍しいらしい。

同業者ならば榎河家と知った上でこうした反応をするのは珍しいことだ。

「化け物に取り憑かれ困っているなら力を貸すつもりで来たんだが…どうやら見当はずれだつたらしい」

「それにでんぱんにやられとつて力なんか貸せるんかいな」

「全くだな」

伊緒里の歯に衣着せぬ物言いに楓之進は苦笑を浮かべる。剣を交えたのが退治するべき凶悪な妖だつたなら今頃は…。

「そちらは妖退治を生業とされていらっしゃるんで?」

彼は榎河を知らぬようで、成一郎にしてもやはり草薙といつ名は心当たりがないのだが改めて確認する。

「いや、仕事つてわけじゃない。ただ、昔から常人には見えぬもんがみえるんでね」

腕つ節をいかして妖に困っている者の手助けをしているのだとう。

「噂を聞いてか入門して来るのも“見えつけまつ”のが多いんだ。今じゃ道場ぐるみだな」

道場主だところのモ近々の近くに越してくるところのモ本通り
しい。

「さつきの綺麗な兄さんも、やはりあれか? 人ならざる者つてやつ
かい?」

「なんや、わからんと挑んだんかいな」

伊緒里はあきれたよつた、面白がるよつたそんな表情だ。

「セレーノそれだよ」

それ呼ばわつされた蒼はあつたつと正体を暴露されたことに顔を
こわばらせた。

「成一郎! ?」

田頃から田立つなど口を酸つぱくして言つ彼がどるには意外な行
動だ。

楓之進は蒼よりも更に驚いた。

このちょこんと座つた人形みたいに可愛いのと見た田には美人だ
が喋ると騒がしいのはこの家の娘か道場主の妹かと思つていたの
が、その子供の方があの青年なのだと言わればにわかに信じがた
い。

「本当か! ? 普段はその姿なのか?」

「そや。あないに別嬪やつたらまたで田立つやうへまおウチせこ
つちの姿も可愛くて好きやねん」

伊緒里が見当はずれな回答を返した。

楓之進はぐるりと周囲を見回す。

「これだけ妖が「うじやうじや」とい屋敷は初めてだと改めて思った。

「こんなにも化け物がいて危険じゃないのか？まさかあんたも　」

「私は人間だよ」

成一郎はクスリと笑う。

「「」の子等は草木と同じで自然界に当たり前に存在している。面白
そうな事があるとすぐに集まつてくるんだ。うちは代々妖と縁深い
家でね。妖がらみのやつかいごとがよく舞い込んでくるんだが、た
いがいは人間が火種を作っているものさ。でなければ他愛ないただ
のいたずらですよ」

楓之進はこれまで妖を退治してきてそんな風に考えたことはなか
つた。

妖が全て悪だとは言わないが、人間を困らせるやつかいでわざら
わしい存在と考えていたのだ。

「しかし、いいのか？そんな事まで俺に話して。普通、退魔師の家
系はあまり大っぴらに「そつだと明かしたがらない」ようだが」

「「」近所のよしみですよ」

成一郎は嫌みのない笑みを浮かべる。

「まああなたも私も同じようなもんだ。協力してやつていく方が互
いの利になるでしょう？仲良くやりましょう」

「あ……ああ」

「」の神河成一郎と、「つかみ所のない男はおそれべ」とは比べ物にならないほど深い闇を見知っていると思えてならなかつたが、こいつって化け物達とほのぼのと過ごしている所を見れば悪意のある言葉とも思えず、楓之進はただ頷くしかなかつた。

それからとこりもの、楓之進は度々神河の家を訪れては蒼に手合わせをせがむようになった。

その日も早朝からやつて來たと思えば、準備運動とばかりに成一郎の道場の門下生達をばつたばつたと投げ倒している最中だ。

門下生の中には妖の血を引く者もいるのだが適わないほど、楓之進はやはり相当地に腕が立つた。

「また來てるんだけどビー！」

「ちよいと相手をしてやればいいだろ？。減るもんでなし

「洗濯物が片付かない！どうこいつもりなんだ！？」

蒼は中庭で洗濯用の桶を抱えたまま、納得いかない顔で主を見ている。

こいつなつたのも成一郎が蒼の正体を明かしたせいだと言いたげに。ほつきが投げ捨ててあるところを見れば伊緒里はとっくに掃除をほつたらかして道場の様子を見物に行ってしまったようだ。

「のままで掃除も終わらない。

やれやれといったよに成一郎は頭をかいた。

「どうこいつもりつて、あの男に言つた通りだよ。味方は多い方がいいだろ？」

成一郎の視線が虚空に投げられ、そこには何かを見つめる。

「これからこの国は変わる。時代が動き動乱が起るよ。進むべき

道を示す者が現れるまで人の世は混乱し、人の心が乱れれば魔性が多く生まれるものさ。人にも妖にもね。そんな時に仕事の邪魔をされでは厄介だ。こちらに取り込んでおくにかぎるわ」

それは彼の本音だつただうつ。

成一郎の言葉通り時代のうねりはやがて大きくなり、人も妖も巻き込んでゆく。

人は変化を受け入れるのに時間がかかる。

受け入れてしまえばなんて事はないのに反発は必ず生まれるのだ。それに伴つて生じる歪み。

激動の時代の裏でもやはり光と闇の秩序を保つ役目を榎河は担わねばならない。

それが過去から現代へと脈々と受け継がれる榎河の嘗みの一部であるのだから。

番外編第一弾は楓太の「先祖様と榎河家の出会いの物語でした。

幕末好きです！

なので幕末の話を書いてみたかったのですが、残念ながらあまり詳しくないもので。

ほのぼの話を書きたかったといつゝこともあります、やひーっと日常を描いた話になってしまいました（汗）

読んでいただきありがとうございました。

誕生日記念（複数枚）

今回は本編の七年あまり前のお話です。
キャラバトンにて叶斗は3月3日生まれといふことが明らかになりましたので、誕生日記念に書いてみました。
では、どうぞ

叶斗は誕生日があまり好きじゃない。

否、正確には自分の生まれが今日なのが嫌なのだ。

三月三日。

雛祭り。

彼は今日で九つになつたといふのに少しもワクワクした気分にならずにいる。

おめでたい気持ちになれないのは少しばかり素直ではない彼の性格的な問題だけではない。

もう三月だといふのに雪が降つていた。

「かなちゃん、いっしー。」

自分とあまりかわらないくらいの子供の声が呼んでいる。
父の式神だった蒼には現在契約を交わした主がない。

叶斗は彼を式神にするべく修行中の身で、今もその一貫であると言えた。

そろつて人形みたいに可愛らしい二人はここ数日街を走り回つている。

逃げ出した雛人形を捕まえて持ち主に返すために。

この時期になると必ずそういう依頼が少なからずあつた。

雛人形も羽を伸ばしたいらしい。

その人形は大切にされてきたからこそ心を得たのだけど、大切にしまわれているのも退屈で、せつかく箱から出られたのだから外の世界を満喫したいと思うのも仕方がないのかもしれない。
けれど雛祭りに雛人形がいないのでは始まらない。

そんなわけで叶斗と蒼は「ひして街中を走り回っているのだ。

「あの子で最後のはずだよ。早く持ち主に返して、ケーキ買って帰つてお誕生日会しなきゃね」

「そんなの必要ない。子供あつかいするな！」

と黙つてもまだ十分子供だ。

叶斗はふいとそっぽを向く。

足元を見すに走つたものだから雪と泥でぬかるんだ地面に足をとられた。

転びかけた叶斗を慌てて蒼が支えて泥だらけになるのは避けられたが、追つていた人形の姿が消えている。

見失つてしまつた。

「ぼくあつち見てくるから、かなちゃん少し休んでいいよ」

「僕は別に」

疲れてない、と黙つとしたけど実際には少し疲れていた。

でなければ雪で滑つたりするほど注意力散漫になつたりはしない。

蒼は二口りと笑み作り壙を軽く乗り越えて姿を消す。

それが冗貴風を吹かせてこるよつに見えて叶斗は眉間にシワを刻んだ。

本当は子供扱いされたつて仕方がない。

蒼は今は叶斗とそほど変わらぬ年に見えるが、実際はもつとずっと長く生きていて、立派に成人した本当の姿だつてある。

それでも反発してしまつのは早く彼の主となり榎河家を率いていかなければという焦りにも似た感情からだつた。

とはいえたまづ小休止。

雪はしんしんと積もり続けていた。

「一トの襟をぎゅっと閉じて、叶斗は白いため息を吐き出した。
一年に一度きりの特別な日なのになぜ他人のために駆けずり回つ
ているんだ。

きつと毎年こつなるんだらうな。

父が生きていた時も三月三日は決まって忙しそうだつたつけ。
誕生日会もバースデーケーキも自分には必要ない。

さつきそう言つたのはハ割方強がりだ。

気が滅入るから考えないようにしていいるけど。

今日は女の子の成長を祝うお祭りだから同じくらいの年頃の女の子
達は家族で楽しく過ごしていいるだろう。

自分だつて本当なら暖かな部屋でケーキを食べてまた一つ大きく
なつたことを祝われていたつておかしくないのに。
子達は家族で楽しく過ごしていいるだろう。

ちよつと寂しくなつた。

誕生日なんて祝つてゐる暇がないのはわかつてゐる。

父がいなくなつて、役目を継ぐのは自分なのだから。

早く父のような立派な術者になるんだといつ使命感が残りの一割。
それで何とかくじけずに済んでいいるけど。

やつぱりケーキは食べたいと言えば良かつたかも、などと考えて
いた時だつた。

雪をかぶつた生け垣の向こうで何かが息を殺していいる氣配がする。
さつきまで逃げ回つていた雛人形だらうか。

その割には邪悪な氣配に思える。

叶斗は足音をたてないよつと近付くこととした。

とはいえてはこちらに気付いていて、様子をうかがつてゐる
よつなのだが。

一步。

また一步。

生け垣の中の妖は動かない。

更に一步。

突然妖気が強まつた。

同時に生け垣から灰色の生き物が勢い良くが飛び出して來た。

それは人間の頭ほどもあるうかという巨大なネズミ。

動物達の負の念が生んだ魔性の存在だ。

捨てられたペットや虐げられた動物達から生まれたものだから人間を恨んでいる。

人間を恐れてもいるから普段はあまり人を襲わないが、今日の前にいるのは幼い子供ただ一人。

それを幸いとばかりにこちらを威嚇して鋭い歯と爪を向けてきた。叶斗は素早く九字を切る。

精神を集中させ、調伏のための符を取り出し真言を唱えようとするが妖怪は思つた以上に動きが速い。

思わず後ずさつて、叶斗はポケットからこぼれ落ちたものがあることに気づいた。

それは父が残した符だった。

お守り代わりに持つていた物だ。

薄い紙でできた符はひらりと白い雪に落ちて、懐かしい父の文字が一瞬力を帯びる。

まだ込められた靈力が残つていたのかと思い見ていたら、そこから雪が盛り上がり何か丸っこい物が生まれ出た。

雪でできたうさぎ。

大人の手の平ほどの大きさのそれは、雪の上を素早い動きで跳ねる。

跳ねた跡から一回り小さなうさぎが何匹か生まれ出た。

うさぎ達はネズミに近付き周りをとり囲むように跳ねて回る。うつすらと結界が出来たことに叶斗は気付いた。

ネズミの動きが鈍る。

印を結んだ指先をもう片方の手の中の符にかざし靈力を込めて放

つた。

ネズミはほんの小さなネズミへと分裂して様々な方向へ走り出す。何匹かは雪うさぎに阻まれたが大半は逃げ出した。けれどさや波のように力が広がって飲み込まれた化けネズミ達は抵抗むなしく浄化されてゆく。

やがて放った符だけを残してそこに静けさと真っ白な風景が取り戻された。

叶斗が緊張をといて息をつくといつさぎも跳ねるのをやめる。

足元にあるのはもうただの雪でできたうさぎだった。

しかし父の思いは死してなお自分を護ってくれたのだと、叶斗は嬉しくも切ない気持ちになる。

窮地を救ってくれたその雪うさぎをそっとすくい上げた。

「かなちゃん！大丈夫！？」

ただならぬ気配を感じて慌てて戻ってきた様子の蒼はしつかりと雛人形を小脇に抱えている。

「雪うさぎ、雪が降るとやきちゃんもよく作つてたつけ」

やきちゃんとは叶斗の父偉史のことだ。

そう言われてみれば雪が降った日は雪だるまではなく作るのは決まって雪うさぎだった氣がする。

自分が仕事を任せっきりにしてそれを作っていたと思われるのは心外だが、それを訂正するのはこの際どうでもいい。

蒼の少し後から現れた良く見知った一人の人物に叶斗は目を見張る。

「帰ったのではなかつたのですか？」

叔父の暁史とその式神伊緒里の突然の出現に叶斗は驚きを隠せなかつた。

二人は数年前から関西に居を構えている。

昨年叶斗の父親が亡くなつてからは何かと旅にかけて、このうちとあちらを行つたり来たり。

急ぎの仕事が入り今頃には関西へと発つてゐるはずであった。

「この雪やせかい、出発を遅らせね」としたんや」

伊緒里の関西弁は静かな雪景色に底抜けに明るく響く。

「じゃあ… 今田せうひに…」

ためらいがちに叶斗は聞いてみた。

「ああ。叶斗の誕生日を祝つてから帰つても遅くはないぞ。」

暁史が髪を生やした口元に優しい笑みを浮かべる。

「ケーキ買つてあるで。プリンが乗つたやつやー。」

叶斗の好物がプリンだとこりこりとはわかっているのだと伊緒里は得意氣だった。

本当は誕生日の事も、好物の事も覚えていてくれたことが嬉しかつたのだけど、叶斗はそんなのどうでも良かつたのにとか言ってみる。

ただやつぱり嬉しさを隠しきれていなことは自身では旅付かない。

蒼がそれを見てこいつそりと面白おかしく笑つていたことか。

叶斗は雪の降る口は悪くはないと思つた。

舞い落ちる雪は優くて最初は物寂しく見えたけれど。

何もかもが真っ白に染められて綺麗だ。

冷たいのに暖かいこの雪づくても。

もう動かなくなつたそれを いすれは溶けてしまつそれを、叶斗はできればずっと眺めていたいと思つたけれどじそっと地面上に降ります。

「かなちゃんー早く帰つて誕生日会いつ

蒼のそんな言葉に呼ばれたからだ。

「ケーキ全部食べてしまつで？」

伊緒里が意地悪な笑みを浮かべる。

「こま行くー

今日が毎年雪だつたらいいのに。

そしたら二月三日の誕生日も悪くない。

そんな風に思い、けれど自分がこうして走り回つている事で誰かの笑顔が守られているならそれはそれでいいかな、と思つ叶斗だつた。

本編で蒼の過去編を書いたので、叶斗の過去にもちょびっとだけ触れてみました。

書いてみたら彼らは基本的にあまり変わっていなかつたりしました。たぶん父親がいた頃にはもう少しかわいげのある叶斗だったと思われますがその辺りはまた機会があれば書いてみたいと思います！

読んでいただきありがとうございましたm(— —)m

Crimson Fang・プロローグ（前書き）

こちらは『Crimson Fang』の続編となつております。

血やグロテスクな表現が苦手な方は、注意ください。

月の光が闇をいつそう濃く作り出すその日。女性は仕事帰り、駅へと向かう途中だつた。足下に転々と黒っぽい染みが落ちていて。

彼女は何気なくそれを目で追う。

その先はビルが影を落としているが街灯により完全に暗闇にはなつてない。

何かいる。

暗がりでうずくまる何か。

その何かと目が合つた次の瞬間、彼女は引きつた悲鳴を上げていた。

その悲鳴が引き金になつたかのように、それは目でとらえられないほどに速く女性の腕に噛みついた。

しかし血の滴るのを見て、怯えるように牙をはなす。

悲鳴に気付いて駆けつけた人々は逃げ去つて行く巨大な犬の姿を見たと言つた。

「あれは、犬なんかじゃない。化け物でした」

それは人間と獣の間のような姿をしていた。

後日になつて、唯一その姿をはつきりと目撃した女性だけが証言した内容は表立つて取り上げられる事はなかつた。

世間的には野犬騒動として認知されるに止まる。

しかし、裏腹に、人々の知らないところでこの事件は大きく動いていく。

闇を知るほんの一握りの人間と、闇に属する者だけがそれを知つ

ていた。

人工の明かりが月明かりをぼやけさせる。

光に住まう者。

人間達はそういうた自負でもあるのか闇を拒み、自らの手で光を作り出してしまった。

闇を完全に消し去るかとするかのよつこ。

闇に住まう者。

今となつてはその存在に気付く者は少ない。

それくらいひつそりと彼らは生きている。

ほんのわずかに残された街の闇に 時には人の中に潜みながら。

そう、普通であれば闇は光をかき消すことはない。

ただ時にその秩序からはずれた行動をとる者が現れるのも事実。

それは自らの意志か魔性に囚われての行動か。

だが、それに目を向ける人間はほとんどいないだろう。

現に街の片隅で起きた野犬騒ぎは今は雑踏の中に紛れてしまつて
いる。

殺人事件ならともかく、ただ噛みつかれて怪我をしただけでは人々の記憶に長くは留まらない。

田まぐるしく移り変わる物が多すぎて、人は変わらず存在する闇に警戒心をなくしている。

しかし、その闇に関わる事を余儀なくされ、その闇の中に生きる意味を見いだす者がいることもまた事実なのだ。

窓の外にはまだ眠るうつとはしない街の明かりが駅越しに見える。

「痛つ…」

黒崎藍香は書類の束と格闘しつつ小さく声を上げた。

彼女がいるのはさして大きくはないビルの中、駅前に近頃開校した予備校の一室だ。

藍香はこの予備校でアルバイトをしている。

高校教師を目指す自分にとつて、きっと将来役立つだろうと考えたからだ。

とはいえ仕事内容は雑用が大半を占める。

今も資料室で書類を整理していたところだった。

その最中ホツチキスの針に指を引っ掛けてしまったのだ。

傷は大したことは無いのだが、玉のように浮かんだ血が流れ落ちそうになつて慌てていると横手から伸びた手がさつとそれをハンカチに包みこんだ。

「大丈夫かい？ 気を付けて」

声をかけてきたのは同僚の男性講師だつた。

彼の名はジェイド・レイン。

かなり日本語が堪能なのがドイツ系のアメリカ人とかなんとかで、彫りの深い顔立ちに優しげな笑みを浮かべている。

グレーのスーツに身を包んだすらりとした長身の彼は映画俳優のようにハンサムな顔立ちとアッシュブラウンの癖のある髪が相まって、女子生徒からの人気は絶大だ。

「す…すみません…」

かくいう藍香自身も例外ではなかつた。
あまりに近くで碧い瞳と目が合つて顔が熱くなつた。
頭の中までぼーっとしてしまつ。

「少し押されていればすぐには止まるよ」

そう言つてジョイドは抱えてきた書類を整理し始めた。
一人きりの空間に藍香の心臓は鼓動を速めている。

「君はあの月を美しいと思つかい？」

ジョイドが唐突に窓の外を眺めやつて言つものだから藍香はとまどつた。

「月…ですか？」

空に浮かぶ月は真ん丸にはほんの少し足りない形をしてい。

「そうですね、今日は雲もなくて月が綺麗に見えますね。満月だつたらもうと素敵でしようね」

「僕にはどちらもあの月といつものが綺麗とは思えなくてね。特に満月がね。変わつていいかな？」

「いえ…同じ月でも人によつて好き嫌いはあるといつかなんといつか…。何か嫌な思い出でも？」

藍香は返答に困り質問を返した。

「幼い頃怖いおどり話でも読んだかな。覚えてはいないんだけどね」

はぐらかされたような気がする。

月の話なんてちょっとロマンチックだと思つたのに、ぜりも期待通りの展開ではなかつた。

しかし、ジョイドなりに何か会話のきっかけをと氣を使つてくれたのかもしれない。

藍香は都合良く解釈しておへりにする。

「黒崎クン。少し待つていてくれるかい?」

やう言つてジョイドは部屋を出て、何分もしないうちに戻つてきたのだがその間藍香は余韻に浸つて呆けたままだつた。

ジョイドは藍香の手からハンカチを取り、代わりに講師控室から持つてきた絆創膏を指先に巻きつける。

藍香は緊張のあまり固まつて動けないでいたが、なんとか思考を取り戻した。

「ハンカチ…。汚してしまつたから洗つて返します」

「いいから、いいから。それじゃ、頑張つてね」

やつぱり紳士的で格好良いなと考えてゐるうえジョイドが扉を出て行きそうな事に気付いて藍香は慌ててお礼を述べ頭を下げた。彼は振り返らずに手を振り去つて行く。

そんなキザと思えるよつた仕草も彼にかかれば映画のワンシーンのようだ。

またぼーっと見つめてしまつていた藍香だったが我に帰り、書類を整理し始める。

生徒達がジョイドと挨拶を交わす声を廊下の回りに聞こながる。

今日はジョイドに出会わなかつた。

彼が通りかかつたならこのダンボールいっぱいの荷物を運ぶのも手伝つてくれたかもしぬないが、そう何度も幸運に恵まれるはずもない。

藍香は両手がちぎれそうな思いをしながら階段を下り、やつとの事で外へと通ずる扉を開いた。

そこは表通りの喧騒を遠くに聞く暗い路地。

「ゴミ置き場だけがあるビルとビルの隙間はまるで世の中から切り離された隙間のようだ。

藍香は箱いっぴに詰まつたゴミの重さも忘れるくらい物悲しく寂しい気持ちになつてしまつた。

さつさとゴミを捨てて立ち去つ。

今日はいつになく仕事が長引いてしまつたけど、このゴミを捨てれば別に何事もなく帰れるのだと藍香は自分に言い聞かせた。

夜も更けた街の路地裏の申し訳程度の街灯が光と共に作り出した影の中で何かが動いた気がして藍香は身を堅くする。

犬か猫だらうか。

そういうえば野犬に噛まれたとかいう事件が起つたのはこの界隈だ。

普通なら逃げるところを藍香は確かめずにはおけない性格だつた。もし野犬なら速やかに通報して捕獲してもらつべきだ。

奥まつて影になつたその場所に藍香は恐る恐るだが近付いてみた。想像と違つ。

犬や猫の大きさではない。

もつと大きい影。

ちょうど人間くらいの。

といふかそこには人間だつた。

暗がりで抱き合つ男女。

今まで男が女の首もとに口づけをしようとしていたが、ぱすつという重い音がなんとも間が抜けた感じで静けさをかき乱した。

藍香は慌てて立ち去りつとして思わずダンボールを落としてしまつたのだ。

後ろ姿の女の首筋から男が顔を上げる。

目が合つた。

「あ…君は…」

藍香の声でさつきまで無抵抗だった女性が突然我に返つたように相手を振り解いて走り去つて行くが男は追おうとはしない。

「やつぱり…架牙深君…いえ、リュウね」

藍香はその男を知つていた。

彼は名を架牙深龍介かがみりょうすけといふ。

藍香が龍介と出会つたのは教育実習先の高校。

その龍介と身体を共有している吸血鬼がリュウで、藍香は彼らに助けられたのだ。

あれから、藍香は龍介のことを忘れられなかつた。

また会いたいと思つていた。

会つたらお礼を言わなければならぬと思つていた。

けれど思いがけない再会にそんな考えは吹き飛んでしまつていた。

それにやつと会えたその人は以前会つた時と随分印象が違つてしまつている。

服装はTシャツにシャツを羽織つた高校生の私服に珍しくないスタイルながらハードなスタッズが付いていたり、ジーンズに付いたチェーンはやら高価そだつたり。

爪は黒く塗つてあるし。

耳にはピアスが両耳で五つ。

他にもシルバー や革のアクセサリーが首にも手首にも指にも。

「誰だ、てめえ？」

リュウは不機嫌さを露わにして叫び。

「覚えてないの？」「ちは切り裂きジャックと間違われたつていうのに」

「…ああ。あん時の『デカくてギヤアギヤアつるせえ魔女か』

藍香はムツとしつつも堪えた。

それより気になることがあつたからだ。

「血を吸つてたの？いつもこんな事してるの？」

それが吸血鬼の食事方法なのだと頭でわかつてはいても、藍香にはそれが恐ろしい行為に思えてしまう。

「あー相変わらずつるせえ。てめえのせいで一口も飲んでねえよ」

リュウは『氣だるげ』に言った。

完全には答えになつてはいなかつたが。

食事を邪魔されて氣が立つていてるが血が足りないせいで怒るのもめんどうになつていてる。

しかしそんな状況など藍香の知つたことではない。

「まさか…人が噛まれた事件、犯人は野犬だつて言われてるけど君

の仕業！？」

「本気で言つてんのか？人に気付かれるなんてドジふむかよ。さつきの女だつて今頃オレのこと忘れてる。バカな人狼と一緒にすんなよ」

「人狼？今、人狼つて言つた？野犬じやなくて人狼？」

「てめえには関係ねえ事だ」

肝心な部分で心底面倒くさそうなリュウに藍香はいい加減腹が立つてきた。

「…君じや話にならない。架牙深君に代わつて」

「ハつ、無理だね。この体は夜はオレのだからな。それにな、命が惜しいなら何も聞かない方がいいぜ」

「何か起こつてるならここにいる時点でもう十分危険よ。教えて！
じゃないと何に気を付ければいいのかすらわからない！」

「…なら教えてやる。満月にここらで暴れてやがつた人狼、近くに潜んでやがるぜ。野犬騒ぎで済んでるうちはいいが。次の満月はもうすぐだ。まあ、せいぜい気を付けるよ」

リュウは唇の端をわずかに持ち上げた。

面白がつてているのだ。

また人狼は現れるだろう。

果たしてそれを知つたところで藍香自身に身を守る術があるとは思えない。

魔女の家系とはいえ生まれてこの方人間と変わらない生活を送ってきた藍香が強力な魔術など使えるはずもない事はすでにリュウも知っている。

知つていて全く助ける気はないという態度に藍香は腹が立つた。

「もうひとつ教えといてやるよ

「何よ！？」

返事は自然と喧嘩腰になる。

「あれ、終電だぜ」

「えー？」

藍香が肩に掛けたバッグを見てこれから帰るつもりだとわかったのだろう。

表通りのその向こうに近付いてくる電車のライトが見える。駅はすぐ目の前で、走ればまだ間に合つかもしれない。

「もう一つ何なのよあいつ！ー

心の声が口に出てしまっている事に気付く余裕もないまま藍香は駅に向かって全力で駆け出していた。

「今度は、人狼？」

嫌な感じの正体はそれだろうか。

生ぬるい街の風に薄ら寒い気配を感じたような気がして、藍香は背筋をふるわせたのだった。

自習室には空き時間を利用しようと授業のない生徒が入れ替わりでやって来る。

自習中にも時間の空いた講師に質問できるサポート体制がこの予備校の売りの一つだ。

藍香は授業を受け持つとはいないが、自習室で生徒達の勉強を見るという仕事を任されることがしばしばあつた

主に他の講師の手が空かないときだけではあつたが、夕刻になりたまたまその自習室勤務に当たつて雑用から解放されたところだ。

藍香は先日の事が気になりつつも仕事を放り出すわけにもいかず、生徒の質問に答えていたのだが……。

やはり気になって仕方がない。

満月に人狼は現れるという。

普段はいつたい何処にひそんでいるというのか。
もし人狼に出くわしたらどうすればいいのか。
それ以前に結局リュウにお礼も言えていない。
連絡先くらい聞いておけば良かつた。

ただし素直に教えてくれるとは思えないけれど。

だったら聞いて腹が立つより聞かない方がマシかも知れない。

答えのない考事が昨夜からずつと藍香の頭をぐるぐるとめぐっていた。

「先生？」

「えー? 何?」

「先生の言つたやり方、ちがくないっスか?」

「えー?...ほんとだ...「ゴメン」

「先生どうかしたんですか?」

「先生おなかでも痛いの?」

「どうか上の空の藍香を周りの生徒達まで心配しだす始末。

「えつ...と...じ、実はそつなの...」

「の際腹痛といふことにてせんもいおつ。

藍香は自習室を飛び出した。

「じつとじていられず部屋を出た藍香だつたが目的があるわけでもなく。

さすがに仕事が終わるまでは勝手に外に出るわけにもいかないと
思い直した。

気持ちを落ち着けたら自習室に戻る。

そう思つてなんとなく、教室のドアの丸いガラス部分から中を覗
き込んだ時だ。

ドキリと心臓が飛び出そうになる。

一番後ろの席で頬杖をついているやる気のなさやつた生徒。

昨日とは違いアクセサリー類はなく、最初に出会つた時と同じ黒
縁眼鏡をかけた真面目そうな出で立ちの しかし目つきの悪さは

龍介といつよりはリュウの方だ。

「それじゃあ誰かに次の文の英訳を書いてもらおうか」

ジョイドは教科書の文章を読み上げて、それから教室を見渡した。

「君は新顔だね。どうだい？わかるかな？」

指名されたリュウがそれはそれは鬱陶しそうにジョイドを見る。

「やはり少し難しいかな？他に誰か…」

リュウがおもむろに立ち上がったのでジョイドは言葉を切った。
「ひとつ微笑んでチヨークを差し出す。

「見下ろしてんじゃねえ」

それなのにリュウがそんな事を言つものだからジョイドは心外そうに目をぱちくりさせた。

見下ろすなと言われても十センチ以上も身長差があるのでから目線はジョイドの方が上。

仕方がないことだ。

一瞬教室に緊張が走ったが、講師という立場上か子供の言ひ方と歯牙にもかけていないのか彼は口元に笑みを絶やさずにいる。引つたくるようにチヨークを受け取り、リュウは黒板に乱暴に英文を書き付けた。

「うん。間違つてはいないね。けれど解答としては不適切だと言わなければならない。スラングを使っては受験で点数はもらえないからね」

リコウの顔には“ああん？ めんべくせえなあ”と書いてあった。

面倒だが言われっぱなしではよけいに腹が立つ。

リコウはもう一度英文を書きつけた。

わざとは違い、流れのよつた美しい文字で。

美しい文章を。

「へえ、やればできるじゃないか。ちょっと古風な言いで回しだけで合っているね。ありがと。戻つていいよ」

けれどコウは席に着いてしませしなかった。

「帰るぜ」

「え？ 何だつて？」

「気分悪いから早退するつて言つたんだ」

「ちよつと待ちたまえ！」

「ねえよ

制止には応じずドアが開けられる。

見た目には反してなんという態度なのかとやにいた全員が思つた

だらう。

ざわめきの中で扉は閉ざされた。

慌てたのは藍香の方だ。

隠れる場所なんてない。

かがみ込んで気配を嗅してみたところで意味なんてなく、まともに目が合つた。

「んなどこで何してる？」

藍香はしきと口元に人差し指を当てる。
ジードにまで見つかっては困るじゃないか。

「どうち来て」

彼女はリコウを無理やり引っ張つてその場から逃げ去つた。

非常階段の踊り場で藍香はリコウを解放した。
そこはビルとビルの間の薄暗い場所で、つまつこのトランク捨てる場がある。

「何か用があるならさつとと言へ。いつまではめえのせいで血が足りてねえんだ」

どうやら氣分が悪いのは本当のようだ。
血が足りないと貧血症状になるらしかった。

「なんで私のせいになるわけ？」

「昨日邪魔したやつが」

「はいはい、悪かったわね。それで、君なんで予備校にいるわけ？」

「とりあえず適当に謝つて話を進めよつとする藍香。

「てめえに関係ねえ」

「人狼を探してるんでしょう？」

「解つてんなら聞くな」

リュウはポケットからタバコを取り出してくわえながら藍香以上に適当に言った。

しかし火をつけようとしたライターを藍香が奪い取る。

「タバコはダメよ。未成年でしょ？」

「ああ？ オレが見た目通りの歳だと思つてんのか？」

「未成年じゃなくとも、健康に良くない」

「吸血鬼に向かつて健康だなんだと馬鹿じやねえの？」

確かに不死身の吸血鬼には無用の心配かもしけないけれど。いちいち人の上げ足を取るようなその態度。もう受け流すのは限界だった。

「少しくらいまともに会話できないわけ！？ 見た目と違つて大人だつていうならレイン先生みたいに大人らしい振る舞いしてみなさいよー！」

「レイン？ あいつ… いけ好かねえ」

リュウは彼を気に入らない理由もあるのか、しかめつ面を作る。しかしだ単に引き合いに出されたのが面白くないようにも見えて、ジョイドの爪の垢でも煎じて飲めばいいのに、と藍香は内心でつぶやいた。

「レイン先生には適わないって、せめて男らしく認めたら?」

「んだと? オレのどこがあいつに負けん?..」

「性格、見た目、全部。レイン先生は紳士的だし背だつて高いし。見下ろすとか言ってひがんでたのは誰だっけ?」

「オレは本当はあんな奴に見下されるとちつこくへねえ! 龍介の体が悪いんだ」

身長のことと言われてよほど腹が立つたのか、リュウが声を荒げた。

だが次の瞬間には屈み込んでしまう。貧血気味なのに興奮したため目眩を起こしたのだ。

「ちょっと……大丈夫?」

思わず藍香が心配するが程なくしてリュウは立ち上がった。非常階段を下へ向かう。

もう言い合のうのも面倒だと言わんばかりだ。結局人狼について聞けずじまい。

本当に体調が悪いなら藍香に止めようもない。

「あいつ、あんま関わるな」

ただ、最後に残した眼差しは真剣さを帯びて真っ直ぐで、声は夜の闇に溶けるくらい静かだったから、藍香の心にことさら深く残つた。

朝っぱらから重い荷物運びの雑用を言いつけられた藍香は気分まで重く、内心深いため息をついた。

「この講師は男性が多い。

それなのに何故か弱い女性にばかり荷物を運ばせるのか。

平均的な女性より身長もあるし、か弱くは見えないという理由はこの際気付かないふりをする藍香だったが、先日自習室をほつたらかして上司から大目玉をくらつたばかりである。

クビになりたくなければ今は文句を言わず『えられた仕事に専念するしかなさそうだ。

講師控室と資料室を何往復かしているうちに廊下はだんだんと生きやかになってくる。

生徒達が増えてくる時間だ。

藍香はその中に見知った顔を見つける。

歩いてくるのを見るだけで昨日との雰囲気の違いは明らかだ。

「架牙深…君？」

「お久しぶりです」

穏やかな笑みが浮かぶ。

藍香はリコウではなく龍介に会えたことに素直に嬉しくなった。

「良かった、やっと会えた！前に助けてもらつたお礼もまだ言えてなかつたから」

「いえ。あの時は犯人だと疑つてすみませんでした。あの…それ、手伝いましょうか？」

やはり彼はリュウとは違う。

リュウと話すと売り言葉に買い言葉になるが、龍介にならレインに負けているとか言つたりしない。

「人狼を探してるのよね？」

資料室に入つた所で、誰にも聞かれてはいないだらうけど藍香は念のため声をひそめる。

「見つけてどうするつもり？ 戦うの？」

「相手の出方次第ですが、むやみに傷つけはしません。安心してください」

「危険なことにはならない。なのに君が切り裂きジャックや人狼を追うのは何故？ 山城つて刑事さんに会つたけど君自身は警察官つてわけでもなさそうだし」

「仕事ですから。ある筋からの依頼でね。闇に住む生き物と人間との共存のため。秩序を乱す者は止めなければならない」

龍介が浮かべる笑みが自嘲めいたものに変わった事を藍香は気付いたどううか。

「危険な相手に不死身の吸血鬼はうつてつけでしょ？ 警察と同じ犯人を追う場合も、警察が依頼者の場合もありますから顔見知りにもなります」

正確には、榎河に来た依頼であり、龍介自身はいわば雇われの身

だ。

しかし榎河の名に關しては藍香に明かすことはできない。
藍香が次の言葉を選ぶまでに少しの間があった。

「誰が人狼なのかはもうわかつてゐるの？」

「…」
れ以上関わらない方がいいと思ひます

帰つてきたのはやんわりとした拒絕だつた。

「危険なことに巻き込みたくありません。後は任せてくれればいいんです。あなたは暗闇の世界で生きる必要はないんですから」

人間でいたいなら関わり合つてはいけないのだと彼は言つているのだ。

相変わらず笑みを浮かべる龍介の瞳の奥にはどこか哀しげで寂しげな色がある。

前もそうだつた。

この瞳を見てしまつたから、気にならずにはいられなくなつたのだ。

リュウのように威圧感はないが、それ以上は何も聞けなくなる。
龍介がリュウよりももっと遠い存在のように思えて、藍香は立ち去る彼にかける言葉が浮かばなかつた。

授業が終わった教室は束の間の開放感に包まれる。

「ラーメン食い行こうぜー」

「おー行く行くー」

「迅じんも行くだろ?」

言い出した男子生徒は何人かに声をかけ、参考書をバッグに詰めていた望月迅にも声をかけた。

「いや、俺はいいわ」

迅はちゅうっと申し訳なさそうな笑みを作る。

「最近付き合い悪いぞ」

「ゴメンな。じゃ」

「冗談めかした不満に迅はあつさりとそう答こたえ教室を後にした。街はすっかり夕闇に沈んでいる。

とはいえたまだ人々が眠る時間でもない。

普通なら友人達と少しくらい息抜きをしたいと思つ。

受験生にだつてたまにそういう時間は必要だ。

けれど誘いを断つたのは体調に違和感を感じていたからだ。

迅は根っからのスポーツ少年である。

去年までサッカーをやっていて体力には底なしの自信があつた。けれど体の奥が熱いのは風邪でも引いて熱があるのだろうか。実はこういう感じは初めてじゃない。

ひと月ほど前だつたか。

予備校に通い始めた頃。

その時は寝込んでひどい悪夢を見た気がする。

そこまで悪化しないうちにさつさと帰つて休もう。

迅は胸の奥に沸き上がる不安とは別の何かに必死で気づかない振りをしながら駅へと急いだ。

駅のホームへとたどり着き、迅は振り返つた。

何かに見られているような気がしたのだ。

それも何か恐ろしいものに。

どうにも背筋がゾクゾクする。

しかし電車を待つ人々の中に同じ予備校の生徒らしき男女が何人かいるのを見つけただけで、他に何もおかしなところはない。

背筋のゾクゾク感はいよいよ本気で風邪かもしぬないとため息をつく迅。

その後を追つてリュウはさりげなく駅のホームを移動した。

「あいつが臭えのは確かだが、人間の血の匂いが濃すぎるぜ」

呟いたのは身の内の存在にだ。

今は何という事はない普通の少年だが、迅が人狼である可能性は非常に高い。

ただ、それに本人すら気付いていないのが問題だ。

無意識に人狼と化すのか。

とはいえたしてこんな奴が満月に人狼の血を目覚めさせ人間を襲うことなどできるのかとリュウは思う。

完全に彼が人狼だと断定できているならともかく、基本的に、彼が人間であるうちは手を出すことは出来ない。

次の満月、それが運命の分かれ道であると知つてゐるかのようにな月はその輝きを強めている。

その事に迅自身は気付く由もなかつた。

非常階段の踊り場で龍介はタバコを取り出した。

実を言えばヘビースモーカーなのはリュウよりも龍介の方だ。
授業の合間にまでこうしてタバコに火を付けている。

龍介はゆっくりと煙を吐き出した。

目で追え、ビルに挟まれた細い空からわずかに降り注ぐ光が眩しい。

彼はリュウほど日の光を疎ましくは思っていない。

確かに直射日光に長く当たれば体力の消耗は激しくなる。
しかし灰になつたりはしない。

それは龍介が普通の吸血鬼とは少しばかり違つことを示していた。
そうしてタバコが半分ほどになつた頃だ。

「君はこんな所で何をしているのかな？」

振り返ると笑みを浮かべてジョイドが立っていた。
足音にも扉の開く気配にも気付かなかつた。

夜よりも感覚が鈍るとはいえ吸血鬼のそれは人間よりもはるかに
鋭い。

それなのにだ。

血晶剤ばかりに頼つて生体から血を接種していないからだとリュウ
が頭の中で指摘する。

血晶剤とは血液から成分を取り出しカプセルに閉じこめた薬であ
り、龍介は定期的に接種しているのだが。
しかしやはり新鮮な血液には及ばないのが実状だ。

血が足りていなければ格段に感覚は鈍る。

さらに酷くなればこんな風に活動することだつて出来なくなるか
もしれない。

やはり全く人間の血を接種しないという選択肢などないといつこ
とに龍介は気付いている。

気付いていて気付かないふりをしているだけだ。
だからリュウもしつこくは言わなかつたけれど。

「僕にも一本くれるかい？」

タバコをくわえたままだつたことを失念していた。
龍介は内心でリュウとジェイド両方に苦笑を返す。
喫煙を咎めるでもなくにこやかに近付いてくるジェイドの真意は
読めない。

二人の間には緊張感が生まれていた。

「授業態度も喫煙も、君はちょうど大人や社会に反抗したい頃な
はわかるよ。しかし今は受験に向けて大切な時期だろ？ 好き勝手
に振る舞うべきじやない、と一応大人として進言しておくれよ。火を
もらえるかな？」

タバコを指に挟んで弄びながらジェイドは言つ。

「……どうぞ……」

龍介がライターを取り出すとジェイドは笑みを深くした。

「まあ僕は獲物さえ狩れればあとはどうでもいいんだけれどね」

ジェイドがゆっくりと煙を吐き出しながら言つのと、タバコが龍
介の唇からこぼれ落ちるのはほぼ同時。

腹部に視線をやれば深々とナイフが突き立つっていた。

「……っ……あ……」

鉄の柵にしがみつくように何とか身体を支える。足下には赤い雫がポタポタと音を立てて落ちた。それを田にしたジョイドのにこやかな笑みは残忍さを帶びて。冷たく暗い炎を宿した瞳で龍介に向かい懐から取り出したもう一本のナイフを構えた。

次に狙うのは心臓か。

普通のナイフなら致命傷になり得ない。けれどこのナイフは違う。

銀製だ。

心臓を貫かれても無事だといつ保証はない。

「ひんなとにかくレイン先生がいるの?..」

「絶対こいつに行つたつて」

「非常口から出でたつて嘘つの?..」

「わかんないけど。でも、行つてみればわかるつてー。」

近付いてくる女子生徒達の声。

ジョイドが一瞬氣を取られ、視線を戻した時には龍介の姿はそこになかった。

彼は追おうとはしない。

ことさらゆっくりと煙を吐き出し、ビリせ逃れられはしないのだ

と嘲笑つた。

「口袋は置き場は昼間でも薄暗い。

何かがガガガゴソと音を立てていた。

数日前にリュウに出くわした場所だ。

今日はいるはずもないのだけど。

気になつて覗き込めば口袋を抱えた藍香を見つけて野良猫が猛ダッシュで逃げて行つた。

「よこしょつ……と」

「口袋を一つ大きな口袋箱に放り込んでパンパンと手を払つ。満月はもう明日に迫つてゐる。

龍介までが首を突つ込むなと言つたがどうしたものかとため息をついた。

そこへ突然上から降つてきたものがあつたから、藍香は思わずぎやつと小さく悲鳴をもらつた。

降つてきたのは人だ。

「架牙深君ー？」

藍香が呼びかけても彼は膝を着いて着地した体勢のままつづくまつていてる。

この上は非常階段。

つまりそこから飛び降りたことになる。

しかし彼は飛び降りた事で怪我をしたわけではないらしい。

彼が自らの体から引き抜いたのは血に染まつたナイフだった。

刃先から柄までが銀でできたそれは赤い糸を引いて地面に転がる。けれど血が止まらない。

傷がふさがらない。

龍介は血の氣の薄い唇を噛み締めた。
まだ日中。

血が足りていらない今の状態では銀製の武器による傷が癒せようはずもない。

ナイフに付いた血が灰になつてたらさらと落ちるのを見て藍香は冷たい手に心臓を掴まれたような怖さを感じた。

龍介が人間ではないことを田の当たりにした恐怖ではなく不死身のはずの吸血鬼が傷を回復出来ない事態が起こっているのだという怖さだ。

自分が何とかしなければ。
助けなければ。

そればかりが藍香の思考を占めていた。

でも、どうすれば？

その答えに藍香は一つだけ思い当たつた。

「しつかりして！今、血をあげる」

藍香は「ともあろうにナイフを拾い上げると自らの指に刃を当てるのだ。

いらない、龍介はそう言おうとした。

人の血を飲む事に嫌悪を感じずにはいられない。

それなのにドクンと鼓動が跳ねる。

白い指先から流れ出した真つ赤な色から視線が放せなくなり、理性が書き乱される。

頭の中でリュウが何か叫んでいた。
やめておけと言つてているのだ。
まるでいつもとは逆だ。

けれど、龍介は自らを御することができなかつた。

惑わされているかのように引き寄せられ、温かな血を口に含んだ。

その瞬間衝撃に近い感覚に襲われる。

今まで味わったことのないくらい甘い血の味、血の匂い。こんなに少しでは足りない。

もつと血が欲しい。

唇が指先から腕へと移動しても藍香はそれを受け入れた。本当は怖かつたけれど、これは輸血と同じ。

人助けなのだと自分に言い聞かせて。

龍介は衝動に任せて白い肌に牙を食い込ませかけ、しかし乱暴に身を離した。

「余計なことすんな！！」

それはリュウの声だった。

「貧血だつたんでしょう？ 血が足りないって。前みたいに血を飲めば怪我だつて治るんじゃないの？」

「るせえ！ 消えろ！ ！」

藍香は返す言葉が浮かばないほど腹が立つた。消えろとはあんまりだ。

あんなにも勇気を振り絞つて血をあげたのに。リュウの血の色の瞳を睨み付けて思い切り拳をその頬に叩き込んだ。

「なによ！ 助けようとしたのに、そんな言い方……」

涙が出来うだが泣くのは嫌だった。

ぐるりと向きを変えてそこをする。

藍香が行つてしまつたのを見てリュウはそのままビルの壁を背に

座り込んだ。

リュウが出てこれたのは龍介が吸血衝動に負けて意識を手放したから。

幸いここには太陽の光が届いていない。

でなければ昼の光の中で身体の主導権を得るのは彼には難しいことだ。

リュウは珍しく頭を抱えた。

平手ではなく拳をくらつた頬はジンジンと痛んだがそれも無視して。

「魔女の血…」

それは吸血鬼にとって一度口にすれば忘れられない麻薬のやうなもの。

ほんの少し口にしただけなのにもう甘美な誘惑に捕らわれている。他の血を口に出来なくなつたらおしまいだ。

彼女なしでは生きられなくなる。

そういう吸血鬼をリュウは過去に見た。

あれ以上飲めばおそらくそいつと同じになつていただろう。あるいは、もう…。

「んなわけねえ。あいつはほとんど人間に近いんだからな」

それでもたつた一口で傷を完全に癒すほどの魔力を持つていたのだけれど。

リュウは嫌な考え方と焦りを無理矢理に頭から追い払つた。

満月。

暗闇に魔力の満ちるその日は青空から爽やかに始まった。
悪いことなんできつと起こらないだろうと、そう思わせるほどに
気持ちの良い日だ。

龍介は昨日の一件など無かつたかのように授業を受けていたし、
その視線の先では迅も普通に授業を受けている。

いつもと何ら変わらぬ風景。

そのまま何事もなく一日が過ぎるかに思われた。

日常を打ち破りビル内に爆音が轟いたのは日が傾きかけた頃だ。
非常ベルが鳴り響く。

何が起こったのか理解する暇もないまま生徒も講師も半ばパニック
状態で建物の外へと向かつた。

幸いにも一度目の爆発音は聞こえない。

どうやら爆発は物置になつている部屋からだつたようで、負傷者
は出なかつた。

いや、出なかつたらしい、といつ情報が流れていた。

しかし、実際には外に避難した人々の中に見あたらない人物が数
名いることすら人々は気付く余裕がない。

今はただ混乱の中、ビルを眺めるばかりだった。

「どうして開かないの…？」

藍香は扉の前に立ち渴んでいた。

一步先はビルの外。

しかし扉は堅く閉められ、向こう側は遠い世界のようを感じられる。

ガラスの扉は触ると静電気みたいな痛みがはしり、叫んでも向こう側には届かない。

声だけじゃない。

外からこちらを見ている人達はすぐ数メートルの距離で誰も藍香に気付かないのだ。

「こいつたこどうなつてるのよお」

がつくつとうなだれる。

「じつやうら僕らは閉じ込められてしまつたよつだね」

誰に問い合わせたわけでもなかつたが、答えが返つて藍香は身をこわばらせた。

振り返り少しばかり肩の力を抜く。

ジョイドは困り果てたという表情ながら優しげな笑みを絶やさずいつの間にかそこにたたずんでいた。

ここに留まつていても仕方がないから他に取り残されている生徒がいないか探してみようと促されて藍香はビル内を捜索する事にした。

ジョイドの半歩あとを歩く。

「静かすぎておかしいと思わないかい?」

自分達の他には誰もいない不気味な静けさ。

それに外の喧騒も、救急車やパトカーのサイレンの音も聞こえて

こない。

「そうですね。どうなっているんでしょう?」

「僕にもわからない。夢なら覚めてほしいね」

ジョイドは首をすくめて見せた。

扉は何か不思議な力で閉ざされている。

誰が何のために。

ジョイドには言えないが藍香には浮かんだ答えがあった。

それはおそらく今日が満月であることと人狼に関わっているのだと藍香は考える。

だったらここに自分たちを閉じ込めた者こそが人狼なのではないだろうか。

実は、ジョイドには近付くなとリュウに言われて藍香は彼を人狼と疑っていた。

けれどおそらくそれは間違いだ。

ジョイドは人狼らしき素振りを見せない。

その事に藍香は安心し気を許してしまっていた。

爆発のあつた部屋の扉はひしゃげて外れている。

内部は資料が散乱していて、一部分が焦げた部屋から聞こえるのはスプリンクラーが水を降らせる音だけ。

それが不気味な静けさを強調する。

その静けさに足音が混ざり込んだのを龍介は聞き逃さなかつた。

何かに怯えて逃げているような不規則な足音。

龍介はその足音の主が逃げ込んだらしい教室に気配を殺して近づいた。

教室の中の人物もまた息を潜め、我が身に降りかかった訳の分からぬ災難が早く過ぎ去ってくれることだけを祈っている。

教室の隅で膝を抱えて座り込んでいるのは龍介が探していた人物に他ならなかつた。

扉を開ければ望月迅は弾かれたように顔を上げる。

「お…おまえ…」

リュウの行動によりたいがいの生徒からは近付きたくないやつから奴あつかいの龍介だったから迅も一瞬反応に困つた。
どうしてここにいるのかという訝しみと、一人じやなくて良かつたという安堵感が迅の顔に同時に浮かんでいる。

「怪我はありませんか？」

「ないけど、なんで…なんで窓も扉も開かないんだ…？他に誰もいないのだつておかしくないか？」

「それは…」

真実を告げるべきか、龍介は迷つた。

自分自身が人狼であることを迅は知らないのだから何故閉じ込められているのかわかるはずもない。

説明したところで信じられないだろうし、パニックを起こして暴れられても困る。

「後で説明します。ひとまずここから出ましょっ

今や相手のテリトリーであるこの建物内に留まつていては迅の身を危険にさらすことになりかねない。

たとえ人狼であつても人間として生きたいというなら 秩序を

重んじるというなら 手を貸すのも仕事のつちだ。

龍介の聴覚が近付いてくる足音を捉える。

一人分の足音。

仲間がいたとは気付かなかつた。

この部屋をやり過ごしてはくれないかと淡い期待を抱くも足音は扉の前でぴたりと止まつた。

龍介は身構える。

扉が引かれ、現れたのは予想通りに長身のスース姿。

「おや、当たりだつたな」

ジェイドは言つ。

爆発を起こし、自分達だけをこの場に隔離したのは彼に違ひなかつた。

追い詰めて直接手を下す、そのために。

龍介はジェイドから視線をはずさないまま、左手をズボンの背に挟んだ銃へと伸ばす。

「架牙深君！ それに、望月君？」

しかし予想外の声を聞いて龍介は硬直したように動きを止めた。まさかもう一人は黒崎藍香だつたとは。彼女までがここに残つてゐるとは。

しかも藍香はまだジェイドの危険性に気付いていない。

「搜したよ、君達」

ジョイドは残忍な笑みをその面に張り付けて言った。
おもて

今の状況を見れば藍香は人質のようなものだ。

下手に動けば危険が及ぶ。

ジョイドと共に来るよう促されれば従う他ない。

ピリピリとした空気に藍香はいやな予感を感じ始めていた。

爆発の起った部屋の前でジョイドは足を止めた。
すでにスプリンクラーは水を降らせるのを止めて静まり返っている。

だからジョイドが指を鳴らす音がやたらと大きく響いた。

「さて、狩りをはじめようか

「まさか

」

やはりジョイドが人狼なのかと藍香は問おうとしたのだが、異様な空気を感じて言葉はそこで途切れた。
室内なのに風が吹き荒れ始める。

何処からともなく。

いや、それは床から拭き上がっていた。
積もった書類が舞い上がる。

隠れていた床には堅いもので刻まれた奇妙な模様があった。
円と奇妙な記号とそれらを繋ぐ線。

それが風を生み出している。

ジョイドが懐から取り出した物があった。

赤黒い染みの付いたハンカチが三枚。

一枚は藍香の指先を拭つたものだ。

ハンカチは風の渦巻く模様の中心へと吸い寄せられて行く。

「三匹もいるとは予想外だつたが、まとめて始末してやるつ

“僕の可愛い守護天使、おいで” ジェイドはそう付け加えた。
それは英語だつたから藍香にははつきりとはわからなかつたけれど、残忍な響きは感じられたから背筋が寒くなる。

床に描かれた円と線と記号が光を帯び始めた。

血の跡が残る三枚のハンカチは塵と化し、大気が大きく震える。ゆつくりと何かの頭が、続いて胴体、鋭い爪の生えた手足が現れた。

前進を鎧のような殻が覆い、背には白く輝く翼。

守護天使とジェイドは言った。

見ようによつてはそれは天使に見えるかもしれない。

しかし神の使いといつてはどこにかいびつな形の生き物に慈悲深き心など微塵も感じられない。

口とおぼしき部分がゆつくりと開いた。

甲高い獣の雄叫びを上げたその牙の奥に青い炎が燃えている。

「うわああああ！」

それを見た瞬間に、それまで凍り付いたようにそこに立つていた迅が恐怖にかられ悲鳴を上げ腰が抜けたようにその場にへたり込んだ。

彼の心に刻まれた得体の知れない恐怖がそうさせていた。

思い出せそうで思い出せない。

それが余計に恐怖を増幅させている。

迅でなくともこの守護天使とやらと対峙すれば不気味さを感じずにはいられないだろうが。

龍介が銃を構えた瞬間、迅に向かい青い炎は放たれた。

龍介が放った弾丸が炎を正確に捉える。

それは触れ合った瞬間に反発し合ったかのように光と爆風を生む。迅はその隙になんとか立ち上がりジョイドとは逆方向に走り出す。さらに続いた銃声は爆発音にかき消されたが、突如として辺りに白い煙が立ちこめた。

それは吹き出したといつてもいい勢いで。

爆風に煽られて白い煙は辺りに広がり、あちらとこちらを隔てる煙幕となる。

龍介が続けざまに打ち抜いたのは廊下の隅に設置されていた消火器だった。

煙は急速に広がつて迫つて来る。

「今のは…！」

龍介は藍香の手を掴み、煙に追われるよつてその場を後にした。

ひとまず廊下に立ち込める白い煙を避けて、藍香と龍介は手近な部屋へと逃げ込んだ。

迅はもつと先へと走つて行つてしまつたらしい。

全力で駆けて藍香は息が上がつてゐるのに龍介は息一つ乱さず当たりを冷静に伺つてゐる。

まさか藍香までを狙つてくるとは思わなかつた。

無事で良かつたと思いつつも龍介は息を整えて顔を上げた藍香から視線をそらせる。

本当はもう目の前に現れるつもりはなかつた。

自分が行つた吸血行為に、彼女はいつたいどんな顔をするのだろう。

人外の者に向けられる嫌悪に満ちた眼差しが怖くて、真つ直ぐに藍香を見ることが出来はしなかつた。

しかし、藍香本人はリュウの言動に腹を立てこそすれ、龍介に対し嫌悪感など抱いてはいない。

それは魔女の血筋であるからというよりは、彼女の性格上の反応である。

「架牙深君、昨日の怪我は！？平氣なの？」

「え……ええ、はい……まあ……」

藍香が突然駆け寄つて、シャツを捲り上げるものだから龍介はしばりもどりになつた。

「良かつた治つてゐる。少ししか血を飲まなかつたから、効かなかつたんじやないかと思つてたの。」

藍香はひとまず安堵のため息をつき、そしてまた気を引き締めた。

「レイン先生は何者?あの獣みたいなのは何なの?」

「彼はあれを守護天使と呼んでいました。ジョイド・レインはおそらくエクソシストです」

「エクソシストってあの映画なんかに出でくる?」

「それは悪魔を払う異国の退魔師のことです、多くの場合正義の味方だ。」

「イメージと違うわね。それじゃあ人狼は…」

「望月迅です」

「レイン先生も人狼を捜してたってことね?でも味方ってわけじゃ無さそうね」

「彼らにとつて人間以外は忌むべき存在です。とはいってここまで強行な手段に出るとは…」

迂闊だつたと龍介は思う。

「彼は人狼を閉じこめるための魔法陣をこの建物に仕掛けたんです。そして爆発騒ぎを起こした。人間だけがこの建物から逃げ出すように」

「レイン先生は私達の誰か、もしくは三人ともが人狼だと当たりを

つけてたってわけね。だからここに閉じ込めて……」

「なぶり殺すつもり、なんでしょうね」

龍介がさりと口にした言葉は穢やかでない。

「行こう。先に望月君を見つけないと……」

藍香は自分の身の危険よりも迅の事が気がかりだった。
レインは手段を選ばないから有無をいわさず殺そうとするかもしれない。

魔物が人間を襲うには理由があるかもしれないこと、何かに惑わ
されている可能性があることを藍香は以前関わった事件で学んだ。
だから人狼が凶悪な怪物だと、決めつけることはできない。
逆に迅がレインを傷つけてしまう事も避けたい。

最悪の事態になる前に止めなければ。

「あつ！待ってください！」

危険を省みない藍香を龍介は慌てて追いかける。
先に人狼を見つけなければならぬのは確かだ。
無闇に命を奪うことは秩序を守ることとは程遠い。

藍香を一人放つておく事も、迅を放つておくことも出来ないのは
確かだつた。

「架牙深君、私から離れないでね！」

「わ…わかりました」

逆に言われてしまい龍介は反射的にそう返していた。

リュウがため息をつくのが聞こえる。

薄く煙の残る廊下は不気味なほどに静まり返り、何かの気配は感じられない。

ジェイドがすぐに追つてこないのはダメージを負ったからではないだろう。

ゆっくりと追いつめる。

そうして恐怖を煽つているのだ。

辺りを警戒しながら迅が走り去った先に向かう一人。

きつと何がなんだかわからなくて怯えているはず。

人間には罪を償うチャンスが与えられるのに、人間でないなら生きていてはいけないなんて、そんなのはありえない。

藍香の心の奥には怒りにも似た憤りが生まれていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0555k/>

青天の破片外伝

2011年10月9日03時25分発行